

令和7年度 一般選抜前期日程

国語

注意事項

1. 問題冊子および解答用紙の所定欄に「受験番号」「氏名」を記入しなさい。
2. 解答はすべて鉛筆を用いなさい。
3. 解答は記述式です。文字が識別できるように丁寧に記述しなさい。
4. 訂正するときは消しゴムで丁寧に消しなさい。
5. 問題冊子および解答用紙に落丁や汚れがあれば申し出なさい。
6. 終了後、問題冊子を持ち帰ることはできません。

| | |
|------|--|
| 受験番号 | |
| 氏名 | |

1

次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えよ。

最終氷河期が終わった一七〇〇年前に始まった完新世は終り、人類の活動が地球のさまざまなシステムを変え、それが地層に変化を与え始めているという見方が科学者の中に生れつつあることを知ったのは数年前のことである。その時の議論は、**A** 現在を新しい地質年代とする必要があるとするとどこまで進んでおり、驚いた。

ここで、新しい地質年代を「人新世 (Anthropocene)」と名づけたのが地質学者ではなく、オゾン層破壊の研究で一九九五年にノーベル化学賞を受賞したP・クルツツェンであるところに眼を向けたい。またそれを受けての専門家による議論の結果、「人新世」の始まりは一九五〇年という考え方が主流になっているところが興味深い。一万年ほどの農業の始まりや、一八世紀の産業革命も考慮されたが、やはり一九五〇年が有力のようである。その理由は、二〇世紀後半になってプラスチック、コンクリートなどの大量生産・大量消費時代に入り、土に戻ることにないこれらの物質がこれから長い間蓄積し続けるであろうという予測にある。このような構造物だけではない。エネルギー大量消費、森林の破壊などによる大気中の二酸化炭素の増加による地球温暖化も問題である。更にプルトニウムなどの核物質が核開発によって地球にまき散らされた。これらの物質やそれがもたらした地球の変化は、現在の私たちの生活にさまざまな影響をもたらしていることは事実であるが、これが地層に**(ア)** コウキウ的な痕跡として残るのかどうかは改めて検討しなければならない。残らなければ新しい地質年代と呼ぶにふさわしくないからである。

専門家がどのような答えを出すかは議論の結果を待つしかないが、実は私はそれにはあまり関心がない。「人新世」という言葉が示しているように、今起きている変化の原因は他でもない人間自身にあるのだ。今考えるべきは、ここにあげられているさまざまな課題が、今ここで私たちの生活にどう影響しているかであり、必要なら私たちの生き方を変えることだと思うからである。

まず考えたいのは、地質に痕跡を残すと考えられている変化の時間が地質学での時間に比べて途轍もなく短いことである。私自身のことを考えると一九五〇年は中学生、自分自身にも社会にも責任を感じながら生き始める年齢にあたる。つまり一九五〇年からこれまでの六七年は私自身が一人の人間として、社会の一員として生きてきた時間と重なるのである。そこで、「人新世」という言葉のもつ「人」をどう受け止めるかという問いに対する答はまさに「私」になるわけである。もちろん、私一人が社会を動かしたわけではないし、むしろ本音はこんな社会をつくるためにいっしょけんめいはたらいてきたのではないという感覚の方が強いのだが、この時代を生きたという事実は否定できない。

クルツツェンが、地球環境の変化について語り合う専門家たちの議論を聞いて、「今は

完新世ではなくすでに人新世に入っている」と思わず言ったその時の気持ちは、この変化の原因は私たち人間の活動にあるのだということを確認したかったのではないかと想像している。その奥には、このままでよいのかという問いがあったのだらうとも思う。

B 私も同じ思いを持っているからである。現代文明を批判的に見て生き方を見直そうという提案はこれまでも度々なされてきた。しかし、何も変わらなかったし、今も社会の指導者たちはこれまで通り成長のかけ声をかけている。

なぜ変わらないのだらうと問いながら暮らしている者としては、今回の「地質年代まで変わるのではないか」という指摘はインパクトがあり、人々の行動や考え方を考えるかもしれないという期待を持たされるものではある。しかし、核抑止力などと言い、核兵器禁止条約への参加さえ考えようとしないう人達には何の影響も与えないだらうという声が、自分の中から聞えてくるのである。このまま進めば、恐らく今後地質年代が対象とする長さだけ人類が続くことは難しいであらうから「人新世」の議論は無意味となる。答はここにあるのではなからうか。

一九五〇年代を考える出発点はやはり第二次大戦の終結だらう。世界中の人を巻きこみ、終には原爆使用までした戦いに疲れ切り、言うなればすべての人が新しい世界を求めたのである。米ソの支配権争いはあったが、冷戦という形であり、多くの人の願いは生活の安定であった。

小学校四年生で敗戦を体験した私が求めたのは三度の食事を楽しみ、思う存分本が読める暮らしだった。科学技術によって物の豊かさや便利さを生み出そうという大人たちのかげ声に、映画やテレビで知るアメリカの人々の暮らしが世界中に広がることを夢の実現だと考えた。

まだまだ社会全体が貧しい中で化学を学び、生物化学、更には分子生物学を（イ）セッコウし、それを生かした仕事をしながら平和で豊かな社会で市民生活を送る自分を思い描いていた。ところが、六〇年代には、早くもこの未来に大きな疑問符がつくようになったのである。水俣病、四日市ぜんそくなど企業活動が原因の汚染と健康被害が日常の話題になり、一九六七年には公害対策基本法が生れた。一九六二年出版のレイチェル・カーソン著『沈黙の春』によって、現代文明が「生きもの」へのまなざしに欠けていることに気づかされた。一九七二年には国連人間環境会議が開催され、それと合わせてローマ・クラブ（注1）の委託で作られた『成長の限界』が出版された。当時作られた「宇宙船地球号」という言葉はほとんど使われることがなくなったが、ここで今思い起こされる。これ以降の経緯を述べることはしない。しかし、地球レベルの気象異常が見られる中で大国の大統領が第二回気候変動枠組条約締約国会議（COP21）による「パリ協定」（注2）からの離脱、核兵器禁止条約への不参加を選択する現状がある。被爆国でありながらそれに（ウ）ツイズイするという選択も理解に苦しむ。

「私」は、人間は生きものでありそれを基本に置かなければC一九五〇年代初めに求めた未来は現実にはならないことに気づいているのに、リーダーたちが牽引する社会は、

「人新世」という言葉を生む方向へ動いてきたのである。ここでの「私」は日本で暮らす普通の人であり、世界にも同じ仲間はいくらもいる。

地質学の時間を思考の中に取り入れるなら、宇宙の中での人間の位置づけを考えることになる。宇宙創成から一三八億年、太陽系が生れて四六億年、その中の一つの星である地球に生きものが生れてから三八億年、その中でホモ・サピエンスが生れたのが二〇万年前という歴史が見えてきている。その中で賢く生きるとはどういうことだろうと考えることができるようになった今、私たちにできるのは、文明を持ち始めてからの一万年を振り返りながら、**D**これからの生き方を探ることだろう。

「人新世」の議論で気になるのは、今述べたように私たちが地球というシステムの中にいることは明らかであるのに、外からの視点で語られているところである。そしてこの地球が生きものとしての人間が暮らせないとところになるであろうことを予測する人々は二つの選択を示す。一つは地球を捨てて他の星、たとえば火星に移住することである。第二は生物工学、サイボーグ工学、AIを**(E)**クシして暮らしていこうというものである。現実は今、政治家・経営者・科学技術者は、イノベーション**(注3)**と称してこの方向への動きを明確な構想もなく進めている。この選択の先は、「地球に生れた生きものとしての」という言葉は消して、新人類誕生をイメージすることになるわけだが、イノベーションの提唱者たちはそれを支える理念・思想なしに経済と技術の側面から当面できることを考えているだけのように見える。

楽道家であることでは**(オ)**ジンゴに落ちないと思っ**て**いるのだが、今の流れを見ると、その私にさえ滅亡への道を歩いているようにしか見えない。こんな社会を次へ渡すつもりではなかったという気持が強い。

これぞ正解という答を出せるとは思わないが、生命誌**(注4)**の専門家と日常生活を大切にしたいと願いながら暮らす生活者という二つの重なりからは、一三八億年の時の流れの中で生れたホモ・サピエンスとして生きるという、いわば平凡な選択が最も現実的だろうという答が見える。そして、三八億年もの長い間この地球で生き続けてきた生きものの一つとしての人間の中に組み込まれた生きる力を思う存分生かして、すべての人がそれぞれの生活を生き生きと暮らす日常がイメージできるのはその選択であろうと考える。たかだかこの五〇年で積み上げた現代文明と、宇宙に始まり生きものの中に組み込まれた生きる力のどちらが優れているかと問えば後者だろう。複雑さの中に豊かさを持つさまざまなしくみを見るだけでも、それはわかる。

多様な生きものを仲間としながらその中で唯一、強力な想像力から生れる創造力を持つ人間として、社会制度や科学技術などをどのようにつくっていくか。その選択の中ではコンピュータもゲノム技術**(注5)**もその使い方は**おの**らずと決まり、生きものとして生きる人々を支えることになるだろう。私個人は生命誌を基本に、「人間がつくりあげる文明の中で生きる私と三八億年の生命の歴史の中にあるヒトとしての私を重ね合わせた世界観」を持ち、すべてをこれに基づいて判断している。この方向が地球という星で、生き生き暮らす方法と考え

てのことである。

もう一度まとめよう。「人新世」を地質年代とするか否かは専門研究者に任せたい。ただ、人間を生きものとして見る立場からは、それが意味あることとは思えない。「人新世」と思わず言わずにはいられない状態を続けたら、恐らく「人新世」を地質年代として見届ける人はいないだろうからである。

(中村桂子「『人新世』を見届ける人はいるのか」より抜粋)

注

(注1) ローマ・クラブ —— 一九七〇年に発足した地球の未来に関する民間研究団体。人類の当一面する危機を世界的規模で研究し、政策的提言も行う。実業家、政治家、研究者などの民間人で構成され、日本にも支部委員会がある。

(注2) 「パリ協定」 —— 二〇一五年に気候変動枠組条約第二一回締約国会議(COP21)で採択された地球温暖化防止に関する条約。世界的な平均気温の上昇を産業革命前に比べて二度より十分低く保つとともに、一・五度以内に抑える努力をすることを掲げ、締約国が五年ごとに削減目標を提出することなどを規定している。

(注3) イノベーション —— 技術革新のこと。

(注4) 生命誌 —— 科学によって得られる知識を大切にしながら、生き物すべての歴史と関係を知り、生命の歴史物語を読み取る作業を中心とする学問。博物学や進化論、DNA、ゲノム、クローン技術など、人類の「生命への関心」を歴史的に整理し、科学を文化として捉える点に特色がある。

(注5) ゲノム技術 —— ゲノム編集の技術のこと。生物が持つ遺伝子の中の目的とする場所を高い精度で切断すること等により、特定の遺伝子が担う形質を改良することができ、例えば品種改良のスピードアップが可能となる。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5。

(ア) コウキユウ
 ① 暴動が全国にハキユウする
 ② 予算案をめぐってフンキユウする
 ③ 事件の真相をキユウメイする
 ④ 相手はジキユウセンの構えを見せた
 ⑤ 機智を働かせてキユウチを脱した

(イ) センコウ
 ① 実にセイコウに作られた模型である
 ② 容疑者の身柄をコウソクする
 ③ 相手チームのコウゲキを封じた
 ④ 他の店にタイコウして安く売る
 ⑤ 少年院での生活を経てコウセイした

(ウ) ツイズイ
 ① 凧たは風にあおられてツイラクした
 ② 雌雄イッツイの鹿が描かれた掛け軸がある
 ③ 背骨で体を支えていることがセキツイ動物の特徴である
 ④ 部屋はツイタテで仕切られていた
 ⑤ 星を見ながらぼんやりとツイオクにふける

(エ) クシ
 ① 仕上げに手のこんだサイクを施す
 ② ぶどう畑の害虫をクジヨする
 ③ 壊れたわが家を見てゼツクした
 ④ 先祖の霊をクヨウする風習がある
 ⑤ 新市街と旧市街の二つのガイクがある

(オ) ジンゴ
 ① 記念品をゴショウ大事にしまっておく
 ② その考えは時代サクゴもはなはだしい
 ③ 山中湖は富士ゴゴのひとつである
 ④ 最も安全なゴシン術は逃げることだ
 ⑤ 両チームはゴカクの戦いを演じた

問2 傍線部A「現在を新しい地質年代とする必要がある」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 私たちが物質的に豊かで便利な生活を追求し続けた結果、自然環境から隔離された人工的環境のもとで、人間と自然との有機的な関係が絶たれてしまうようになり、そのことが地層に不可逆的な変化を引き起こしたから。
- ② 私たちが科学技術の恩恵を享受することをあたりまえのこととして受け入れ続けてきた結果、その副産物として森林の破壊や地球温暖化などの重大な環境破壊が生じたにもかかわらず、環境保全の努力を怠ってきたから。
- ③ 自然界に還元されない人工物や核物質の大量廃棄、エネルギーの大量消費などによる地球温暖化といった人間の活動の副産物や副作用が今後も引き続き生み出され、地層にも長期的かつ根本的な影響を与える可能性があるから。
- ④ 核開発によってプルトニウムなどの核物質が地球上にまき散らされたことに象徴されるように、取り返しのつかない汚染の広がりや地球環境に重大な変化をもたらし、現在の私たちの生活にもさまざまな負の影響を与えているから。
- ⑤ 一万年ほど前に始まった農業や、十八世紀に起こった産業革命を契機として、大量生産・大量消費・大量廃棄の経済システムが定着したことによって、現在をそれ以前とは性質の異なる新しい地質年代とする必要が生じたから。

問3 傍線部B「私も同じ思いを持っている」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 筆者は、物質的な豊かさや便利さをひたすら追求して築かれた現代文明とそれに安住する現代人の生き方を、今こそ批判的に見直す必要があると考えているということ。
- ② 筆者は、環境破壊によって地質にはすでに不可逆的な変化が生じていることは明らかである以上、現在を「人新世」と呼ぶべきだという考えを共有しているということ。
- ③ 筆者は、地球温暖化防止のためのパリ協定や核兵器禁止条約への不参加を選択した大国の指導者たちの意識を環境保全へと向けさせる必要があると考えているということ。
- ④ 筆者は、クルツツェンが提唱した「宇宙船地球号」という考え方を、今こそ世界中の人々が共有し、地球環境への関心を高めるべきだと考えているということ。
- ⑤ 筆者は、人間が、自然との共生という生きものとして当然の生き方を取り戻すために、科学技術に依存しない生活様式を模索すべきだと考えているということ。

問4 傍線部C「一九五〇年代初めに求めた未来」とあるが、当時の筆者が思い描いていた「未来」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 科学技術の進歩が必ずしも人間に幸せをもたらすものではないことを自覚しながら、大量生産・大量消費がもたらす豊かさの恩恵を最大限に享受できる日常生活を送ること。
- ② 戦争の惨禍と敗戦後の混乱を経てたどり着いた平和な時代に、専門の学問的知識を生かした仕事をしながら、食事を楽しみ、思う存分本が読めるような日常生活を送ること。
- ③ 物質的な面ではたとえ貧しくても、すべての人が精神的な豊かさを追求しながら生き生きと暮らせるような社会の中で、好きな読書や研究に没頭する日常生活を送ること。
- ④ 映画やテレビを通じて知ることになったアメリカの人々の暮らしのように、科学技術によって生み出された便利なものに囲まれて、物質的に豊かな日常生活を送ること。
- ⑤ プラスチックなどの人工物が蓄積されたり、プルトニウムなどの核物質が拡散されたりすることのない、環境保全の行き届いた安心・安全な社会で日常生活を送ること。

問5 傍線部D「これからの生き方を探ること」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 地球環境に甚大な被害を与えてきた最大の原因が科学技術の発達に頼ってきた現代人の生き方にあることを自覚し、破壊されかけた地球環境を元の状態に戻すために、科学技術に頼ることなく自然との共存を最優先するような生き方を模索すること。
- ② 人間がイノベーションを通じて地球環境そのものに介入できる生き物であることを自覚し、地球上のあらゆる生命を保護するという自らの使命を果たしつつ、人々が快適に暮らせる地球環境を未来の世代に残していけるような生き方を模索すること。
- ③ 三八億年もの長い間この地球で生き続けてきた生きものの頂点に立つ人間の中に組み込まれた生きる力を思う存分に発揮して、これまで積み上げてきた現代文明の成果をあまりとなく継承し、それを次の世代のために発展させるような生き方を模索すること。
- ④ 宇宙創成以来の長い時を経て生まれた地球というシステムの中で、人間自身がそこに生きる「生きもの」であるという自覚に立ち、創造的な営みを通して社会制度や科学技術を構想し、人間以外の多様な生きものと共存できるような生き方を模索すること。
- ⑤ 人間だけが地球というシステムを外側から客観的に対象化して捉えることのできる生きものであるという利点を生かし、できるだけ多くの人々が自然科学の知識を身につけて、それをさまざまな形で日常生活にかしていくような生き方を模索すること。

問6

本文の構成や内容と合致する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
解答番号は

| |
|----|
| 10 |
|----|

。

- ① 筆者は、最初に自らの主張を明確に提示したうえで、自分自身の半生の歴史や現在の社会情勢・国際情勢に言及し、自らの現状認識や人生経験を織り交ぜながら現代文明への批判を展開し、結論として地球環境をめぐる問題の深刻さを改めて指摘している。
- ② 筆者は、まず論説全体の基本的な構成を読者に予告したうえで、「人新世」をめぐる地質学者の主張が誤っていることを、宇宙創成から太陽系と地球の誕生、二十万年前のホモ・サピエンスの登場といった壮大なスケールの歴史に照らして証明しようとしている。
- ③ 筆者は、最初に地球環境と現代文明に関する一般的な見解を紹介し、近年の地質学者の主張がこれらの見解と矛盾することを指摘したうえで、自らの現状認識や人生経験を織り交ぜながら、危機的な状況にある地球環境との向き合い方について論じている。
- ④ 筆者は、人類の未来についての理念や思想なしに、経済的・技術的に解決可能な目先の目標しか設定することができない世界の現状に対して悲観的であり、今後、地質年代が対象とするほどの長さだけ人類が存続することはできないだろうと結論づけている。
- ⑤ 筆者は、近年の「人新世」をめぐる議論を糸口として、自分自身の半生の歴史や現在の社会情勢・国際情勢に言及し、自らの現状認識や人生経験を織り交ぜながら、危機的な状況にある地球環境との向き合い方を、生命科学者としての立場から提示している。

次の文章は諸富祥彦もろとみよしひこの随筆『人生を半分あきらめて生きる』の一節である。
これを読んで、後の問い(問1~6)に答えよ。

学生や若者たちと接していて感じるのは、恋愛とか、結婚とか、子育てとか、私的な事柄について、旧世代基準の「ふつう」を求められることへの強い拒否感です。特に男性にこの感覚は強い。これを新しい時代への「適応力」と見るならば、いまだに「標準世帯イメージ」や「専業主婦」への憧れが強く、「経済的豊かさと安定」を求めて「年の差婚」に走ったりする女性たちは、男性に比べて、適応が遅れていると見ることもできます。

いずれにせよ、多様性をそのまま認める価値観が、若い世代には実感として育ちつつあります。そして多様な価値観を求めることのできる社会こそ、本当の意味で成熟した社会です。

「結婚くらいしないと」「恋愛くらいしないと」と「ふつう」を求めてくる大人の声には、「放つといってくれ!」と言いたくなるのが若い世代の本音でしょう。

(ア)健全です。放つときましましょう。

それに比べると、「夫婦と子ども二人」の「標準世帯」を税制面で優遇するという国の発想の何と不健全なことか。もしあなたのお子さんが「結婚したほうが税金で有利になるから結婚することにした」と言ってきたら、あなたはどう思いますか。もちろん私は反対します。税負担の軽減のための結婚とは、あまりに不純ではないでしょうか。少々脱線しました。話を本筋に戻しましょう。

「ふつうの仕事」「ふつうの収入」「ふつうの結婚」「ふつうの恋愛」「ふつうの家族」といった「ふつう」へのとらわれが、「ふつうから(イ)落伍らくぶしたくない」という気持ちだが、私たちの中に、無用な焦りや不安を生みます。しかも、今や、かつての感覚での「ふつうの収入+ふつうの家族」という条件は、ごく一部の人にしか当てはまらないのです。

「ふつう」であることをあきらめることができなければ、私たちの生活に安心感はもたらされません。焦りや不安に絶えず付きまといられることとなります。Wダブルの意味では、まさに「あきらめる力」が幸せの条件として求められていると言えるでしょう。

ここで私が思い出すのが、アルコール依存症者のためのセルフヘルプグループとして知られているAA(アルコホーリクス・アノニマス)でよく用いられている「(ウ)平安の祈り」という短い詩です。神学者のラインホルド・ニーバーによるものだと書かれています。

神様私にお与えください

自分に変えられないものを受け入れる落ち着きを

変えられるものは変えていく勇気を

そして二つのものを見分ける賢さを

「自分に変えられないものを受け入れる落ち着き」「変えられるものは変えていく勇氣」
そして「二つのものを見分ける賢さ」——これらは、まさに厳しい現代社会を生きる私た
ちすべてに求められているものではないでしょうか。

「あきらめなくてはいけない現実を静かに受け入れ、あきらめていく落ち着き」

「あきらめなくてはいいものをあきらめずに変えていく勇氣」

そして「あきらめなくてはならないもの」と、「あきらめなくていいもの」や「あきら
めてはいけないもの」とを「見分ける賢さ」。

❌この力こそ、現代社会を生きる私たちにまさに求められているものではないでしょう
か。

ここで、もう一つ、指摘しておかなくてはならないのは、「あきらめる」という言葉に
は本来、「ものごとの真実の在り様を明らかに見る」という意味がある、ということです。
「あきらめる」には、もともと仏教の用語として、「真理を観察して明らかに見る」とい
う意味があったものが、日本では「明らめる」もしくはその文語として「明きらむ」とい
う使い方がなされるようになったのです。

「あきらめる」という言葉は、現在では、何かへの思いを仕方なしに断念するという消極
的な意味で使われていますが、「諦」という漢字は本来、仏教用語で「諦観たいかん」「四諦したい」な
どと言われるように、「ものごとを正しく、あるがままに見て明らかにしていく」「明ら
かに見極める」「つまびらかにする」「明らかにする」「さとる」といった積極的な意味
合いの強い言葉であったようです。Yそれが、自分の置かれた現実から目を逸そらさず、つ
ぶさに見ることで、思いを絶たざるをえなくなることがしばしばあることから、現在のよ
うな意味合いで使われるようになったのです。

すべてのものは変化していきます。

若い時に、どんなに健康で強靱きょうじんな肉体を誇った人でも、老いるにしたがって、さまざま
まな能力が衰え、病を抱えるようになり、やがて死を迎えます。同様に、どんなに美しい
女性も、老いて、その美が衰えていくのを避けることはできません。永遠に変わらないも
のは、何一つないのです。こうしたものごとの変化があるがままに見ることが、執着を手
放し、思いを断つことにしばしばつながります。

年齢を重ねるにしたがって、昨日までできていたことが、明日はできなくなることがしば
しばあります。私自身も、半年前、電車で本を読んでいたら、39ほど経ったのち、文字
がぼやけてきて、よく見えなくなる、ということがありました。これはたいへんだ、手術で
も必要な病気ではないかと思ひ、慌てて眼科に行き、検査を受けましたが、何のことはない
ただの年齢相応（歳）の老眼ということでした。まだまだ若いつもりだったので、裸眼
で活字を追えなくなるという体験はかなりショックでしたが、その現実を受け入れざるをえ
ません。

つまり、老眼という自分の身に起きた現実の変化を、「明らかに見る」ことで、いつまでも裸眼で活字を追っていたという「思い」を断たざるをえなくなったわけです。

本来、ものごとを「明らかに見る」「見極める」という意味のあった「あきらめる」という言葉は、こうしておのずと「思いを断念する」という意味でも使われるようになったのでしよう。すべては変化し永遠に変わらないものは何一つないことから、ものごとを明らかに見ることは、それに対する思いを断たざるをえなくなることにつながるのです。

Z「あきらめる」とは、ものごとを明らかに見て、つねに変化していく自然に従っていく、という生きる姿勢を指す言葉なのです。

(文章の一部と本文中の小見出しを省略した。)

問1 傍線部(ア)～(ウ)の表現の本文中の意内容として最も適当なものを、次の各群

の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は ～ 。

(ア)

健全

- ① 身体が健康である
- ② 精神が均等である
- ③ 考え方が正常である
- ④ 肉体が丈夫である
- ⑤ 思考が完璧である

(イ)

落伍

- ① 人として品格を失う
- ② 人と同格でない
- ③ 人よりも成績が悪い
- ④ 人の道を外れる
- ⑤ 人に後れを取る

(ウ)

平安

- ① 心が無事で穏やか
- ② 華やかで明るい
- ③ 平和で戦争がない
- ④ 古都の情緒を想う
- ⑤ 気持ち晴れやかである

問2

傍線部W「その意味では、まさに『あきらめる力』が幸せの条件として求められていると言えるでしょう」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 「ふつう」を追い求める焦りや不安から解放されることで、安心感が生まれる。
- ② 多様な価値観を認めつつ自分の人生が成功する道を必死に探すことで、幸せになれる。
- ③ 「ふつう」とは何かを改めて考え直すことで、自分が幸せになるヒントが見つかる。
- ④ 多様な価値観を持つて多くのことを捨て去ることで、不安のない境地がおとずれる。
- ⑤ 何としても自分だけは「ふつう」を手に入れると努力することで、幸福な日々となる。

問3

傍線部X「この力こそ、現代社会を生きる私たちにまさに求められているものではないでしょうか」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 人並みの人生にこだわると不安を抱えやすい現代社会では、自分の人生そのものをまずはあきらめて、残った目標をあきらめずに達成するために、日々の努力を怠らないことが大切である。
- ② 人並みの人生にこだわると不安を抱えやすい現代社会では、自分の人生は決してふつうにはならないと覚悟することによって、自分なりの安定した人生の方向性を見つけていることが大切である。
- ③ 人並みの人生にこだわると不安を抱えやすい現代社会では、自分の人生の中であきらめても良いものを決めることで、他の全てのこととはあきらめずに求めていこうと願うことが大切である。
- ④ 人並みの人生にこだわると不安を抱えやすい現代社会では、自分の人生において何をあきらめて、何をあきらめなくても良いのかを意識しながら、日々を過ごすための分別が大切である。
- ⑤ 人並みの人生にこだわると不安を抱えやすい現代社会では、自分の人生に役に立つことと無駄と考えることをきちんと見定める意思を忘れず、日々を冷静に送り続けることが大切である。

問4

傍線部Y「それが、自分の置かれた現実から目を逸^そらさず、つぶさに見ることで、思いを絶たざるをえなくなることがしばしばあることから、現在のような意味合いで使われるようになったのです」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 「あきらめる」という言葉は本来、自分を取り巻く現実を細かく直視するという前向きで積極的な意味を持っていたが、結果として自分の人生に絶望してしまう人々が多く発生してしまう悲しさが強調されて、「あきらめる」という言葉に消極性が生まれた。
- ② 「あきらめる」という言葉は本来、自分を取り巻く現実を細かく直視するという前向きで積極的な意味を持っていたが、結果として自分の現実の中で断念することをも多く発見できてしまう点が強調されて、「あきらめる」という言葉に消極性が生まれた。
- ③ 「あきらめる」という言葉は本来、自分の生活の全ての事を明るく照らすという強力で積極的な意味を持っていたが、結果として自分の現実の中で断念することをも多く発見できてしまう点が強調されて、「あきらめる」という言葉に消極性が生まれた。
- ④ 「あきらめる」という言葉は本来、自分を取り巻く現実を細かく直視するという前向きで積極的な意味を持っていたが、結果として人はみな平凡で普通の人生しか送ることができないという実情が強調されて、「あきらめる」という言葉に消極性が生まれた。
- ⑤ 「あきらめる」という言葉は本来、自分の良い・悪い部分を見つめ直すことが大切だという積極的な意味を持っていたが、結果として自分の現実には悪い部分が多すぎると嘆くことが強調されて、「あきらめる」という言葉に消極性が生まれた。

問5 傍線部Z「『あきらめる』とは、ものごとを明らかに見て、つねに変化していく自然に従っていく、という生きる姿勢を指す言葉なのです」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 人が生きていくうえで、社会からやめるよう強いられるものごとが多く存在して行くが、時間が過ぎ去るにつれて、ものごとを断念せずに続けてゆけば必ず報われることとがあるという意義を、「あきらめる」という言葉は教えてくれる。
- ② 人が生きていくうえで、多様なものごとをつねに直視することによって、安定せずに変化の絶えない社会の中にあっても、自然豊かな環境の行く末に人生の道筋を委ねることで幸せを感じられるという意義を、「あきらめる」という言葉は教えてくれる。
- ③ 人が生きていくうえで、自らの人生の中では断念しなければならぬことも出てくるが、時の流れにあるがままで身を任せつつ、人生におけるさまざまなものごとをまっすぐに見つめ続ける意義を、「あきらめる」という言葉は教えてくれる。
- ④ 人が生きていくうえで、多様なものごとをつねに直視することによって、安定せずに変化の絶えない社会の中にあっても、断念せずにものごとに取り組んでいけば自然と幸福な人生を送れるという意義を、「あきらめる」という言葉は教えてくれる。
- ⑤ 人が生きていくうえで、社会からやめるよう強いられるものごとが多く存在しているが、大いなる自然の力を頼りにすることによって、人生で断念しなくても良いことが増えるという意義を、「あきらめる」という言葉は教えてくれる。

問6 この随筆の筆者は、「自分自身の人生をこころ豊かに過ごすために」どのように生きるべきだと主張しているか。現代社会の様相に触れながら百文字以内で答えなさい。(縦書き)

1

| | |
|----------|----------|
| 問2 | 問1 |
| 6 | 1 |
| 3 | 4 |
| 問3 | 2 |
| 7 | |
| 1 | 3 |
| 問4 | 3 |
| 8 | |
| 2 | 5 |
| 問5 | 4 |
| 9 | |
| 4 | 2 |
| 問6 | 5 |
| 10 | |
| 5 | 1 |

(各7点)

(各3点)

2

| | |
|----------|----------|
| 問2 | 問1 |
| 14 | 11 |
| 1 | 3 |
| 問3 | 12 |
| 15 | |
| 4 | 5 |
| 問4 | 13 |
| 16 | |
| 2 | 1 |
| 問5 | |
| 17 | |
| 3 | |

(各3点)

(各8点)

問6

(9点)

(回答例①)

価値観が多様化している現代社会において、普通の人生は求めなくても良い。自分に変えられないものはあきらめるといふ選択をして、ありのままの現実を受け入れることが重要である。

(回答例②)

多様な価値観を求めることこそ本当の意味での成熟した社会である。だから、普通にとらわれることなく、あきらめや、断念をしながら、ありのままに変化していく自然に従うことが求められる。